

皆が「自分の居場所」と思える施設を—— 笑顔と温もりを生むショートステイ

秋田県由利本荘市にある「夕陽の郷」は、利用者の尊厳と自由を重んじる地域密着型のショートステイ施設だ。高橋代表は看護・介護の現場で豊富な経験を積み、そのノウハウを活かしながら、スタッフの思いに応えるかたちで施設運営に励んでいる。本日はタレントのつまみ枝豆氏が、高橋代表の歩みや、この仕事に懸ける思いを伺った。

合同会社 フロンティア ショートステイ 夕陽の郷

秋田県由利本荘市石脇字田尻 10 番地 2
URL : <http://smillings.jp/>



代表社員・施設長 高橋 多生

高校卒業後、製造業を経て看護の道へ進む。その後、介護施設に転職するも、現場の過酷な現実と直面。そんな中で「オムツ外し学会」の思想に出会い、利用者の尊厳と生きがいを追求する介護を実践するようになった。勤務先との方針の違いを経て『フロンティア』に転職し、スタッフの思いを汲むかたちで代表職を継ぎ、現在に至る。

様々な看護・介護の現場で学び 『夕陽の郷』の施設長に

——高橋代表は、社会人の第一歩はどのようなお仕事に就きましたか。

高校卒業後、製造業の工場勤務を経て、看護業界に移りました。学校で資格の勉強をしながら、学費を免除してもらい現場で働くという仕組みですね。

——学びながら現場経験を積めるのは、良い条件ですね。

偶然出会った仕事ですが、この業界には縁があったような気がするんです。と言うのも、私の義父が筋ジストロフィーで、中学生のころは「将来医師になって治してあげよう」と思っていたんです。ですが実際は、医師になるにはものすごく勉強ができなければいけませんし、学費も高い。そうした現実から諦めたものの、看護という仕事で医療に関わることになったのは、この時の思いが繋がっているような気がします。

『夕陽の郷』の充実した環境

『夕陽の郷』は、ホームページでも「とにかく明るい施設です!」と掲げているように、スタッフ全員が笑顔で楽しく働き、利用者にも笑顔を届けることを大切にしている。介護技術に加えてホスピタリティ教育にも力を注ぎ、利用者一人ひとりに寄り添った個別ケアを実践。利用者とその家族が安心して過ごせる環境を整えている。食事は管理栄養士のチェックを通して健康面も安心で、味も好評だという。また、季節ごとのイベントや地域との交流も活発で、日々の取り組みを通してQOLの向上を目指している。2020年11月に開設された新しい建物は、1階建ての木造ながら準耐火基準をクリア。安全性と快適性を両立させながら、明るく温かな雰囲気の中で質の高い介護を提供する——地域に根差したショートステイ施設だ。

——心の奥に、ずっとお義父様や医療分野に対する思いがあったのでしょうか。少年時代の代表に聞かせてあげたい話です。学校卒業後はどうされましたか。

病院に就職して5年間働き、その後は老人ホームに勤務することになりました。私としては、お年寄りが中庭で日なたぼっこしながら歌をうたっているイメージがあったのですが、全然違いました。皆がオムツを付けられて、尿意や便意があっても寝かせられたままで、その光景にショックを受けました。

——福祉分野が、まだまだ発展途上だったころですね。

どこの施設もこうなのかと聞くと、そうだと。あの時代、業界全体がそんな状況だったんです。そして、勉強会に参加させてほしいという話になり、出会ったのが三好春樹さんが立ち上げた「オムツ外し学会」でした。オムツをあてがって寝かせたままにしておくんじゃなくて、オムツを外して利用者の尊厳や人間

性を尊重する介護の考え方を重視しているんです。これは、後のユニットケアにもつながっていく、現代的な介護の“はしり”みたいなものです。

——当時としては、非常に画期的な考え方だったのでしょうか。

はい。衝撃を受け、勉強会を通して福祉の在り方について深く考えるようになりました。そして勤務先にフィードバックし、良い方向に変わっていきました。日常生活動作そのものをリハビリと捉える「生活リハビリ」の考え方のもとで、利用者さんのQOLを高めるのが基本方針です。例えば、施設内のレクリエーションでただ歌うのではなく、外にカラオケに行く。身体を動かすために散歩をするのも、行きたい場所に出掛けるなど。

夜の街に繰り出すこともあって、私も利用者さんを3人連れて飲みに行ったことがあります。無許可で脱走したわけではないのですが(笑)、遅くなってしまったのでコソコソと帰ったら、施設長が腕組みをして待ち構えていました。さすがに怒られるかと思ったら、「飲み代くらい渡すから、出掛けるなら言ってくれ」とおっしゃって。この時の施設長の言葉は一生忘れませんし、私が福祉事業をする上での指針を決めたターニングポイントです。

——すごく良いお話ですね!

他にも、歌が好きな認知症のおばあちゃんが、「NHKのど自慢」に出場されたことがありました。審査員特別賞を貰ったんですよ。以前は1人で部屋で食

事をとっていたのが、その翌日からご家族と歓談しながら食事をとれるようになります。これは本人の変化だけでなく、のど自慢での生き活きた様子を見て、家族側の印象も変わったからです。そこからは服装にも気を使われるようになるなどし、認知症が改善方向に向かいました。ご本人の生き甲斐や趣味などを充実させることや、周りの関わり方はとても大事なんです。これらのエピソードが知られて、テレビの取材が来たり、今後の介護の目指すべきかたちとして、本に取り上げられたりしたこともあります。

——代表が志す施設の方向性が分かってきましたよ。そうして学ばれて、また元の勤務先に戻られたのでしょうか。

学んだことを評価されて、グループ内の別施設の立て直しを頼まれました。ただ、そこで精神的に疲労してしまい退職。その後は地元のショートステイの立ち上げスタッフとして働き、軌道に乗せることができましたが、会社と方針が合わなくなりました。そして、ショートステイ『夕陽の郷』に移ってきて施設長を継ぐことになったんです。

利用者の自由と尊厳を重んじ 地域で一番の施設を目指す

——代表が立ち上げられたのではなく、継がれたかたちなのですね。

実は、こちらに来た当初は会社の内情を確認すると、かなり厳しい状況でした。そのことをスタッフにも話したので

すが、「利用者さんがいる限りは辞めるわけにはいかない」と。皆さんのその熱意に感動して、私も施設長として事業を立て直す覚悟を決めたんです。さらに、コロナ禍でも厳しい時期を経験しましたが、スタッフ一同と共に踏ん張り、現在に至っています。

——情熱を持つスタッフさんたちなので、お仕事をやる上で、大事にされていることは何ですか。

一つは、利用者さんの居場所づくりです。人は自分の居場所がなければ、幸せや安心を感じることができませんから。過ごしやすくコミュニケーションを取りやすい環境を整え、皆さんが「ここが自分の居場所だ」と感じられるような施設を目指しています。また、元気に過ごしてもらえるように生活リハビリにも力を入れています。その中では、何でもやってあげるのではなく、できるだけ利用者さんご自身に主体的に動いてもらえるようにしています。

もう一つは、スタッフの存在です。スタッフが幸せでなければ、良いサービスを提供することはできません。ですから職場環境の向上には力を入れ、働く人も利用者さんも、皆にとって居心地の良い場所になるようにと思っています。

——そう言われると、先ほどお見かけしたスタッフさんも利用者さんも、皆さんとても笑顔でした。

当施設では、可能な限り利用者さんに自由に生活していただいています。スタッフがサポートを行い、外出していただくことも、お酒を楽しんでいただくことも可能です。そのほうが活動的になって、自分の意思で身体を動かすことにもつながります。今後は今よりもさらに自由度の高い施設を目指し、施設都合に利用者さんが合わせるのではなく、施設が利用者さんに合わせる姿勢を貫いていきたい。そして、地域で一番と言われる存在になりたいですね。

(取材/2025年10月)

After the Interview つまみ枝豆

「高橋代表が事業を継がれた当初は、経営状況が厳しかったようですが、そこからこうして事業を継続できているのは代表の方によるところでしょうね。同時に、利益の確保ではなく、あくまで利用者さんを第一に考えた方針が貫かれている点も印象的です。その両立を可能にしているバランス感覚と経営手腕は素晴らしいですね。きっと利用者さんやそのご家族からも信頼され、感謝されていることでしょう。ぜひ今後も長く続けていただきたいですね」

